
フランス語における3種類の *avec NP XP* 構文

Trois types de constructions *avec NP XP* en français

酒井 智宏
SAKAI Tomohiro

論文抜刷

東京大学大学院総合文化研究科フランス語系学生論文集

Résonances 第2号(2003年度)

2004年3月25日発行

フランス語における3種類のavec NP XP構文

酒井 智宏

0

導入

この論文の目的は、McCawley (1983)が論じる英語のwith NP XP構文の示す性質がフランス語のavec NP XP構文にも見られることを指摘し、この構文を3種類に分類する必要があることを示すことである¹。また、技術的詳細に立ち入らない範囲で観察された事実の非変形文法による理論化の概略を示す。

1

「文」を補語に取る avec

通常の見方では、前置詞の補語(目的語)は名詞句、すなわちモノを表す範疇であるが、McCawley (1983)は英語の前置詞withが名詞句ではなくむしろ「文」ないし「節」、すなわちコトを表す範疇を補語に取る用法を持つことを指摘した。このwithの用法自体は伝統文法においても指摘されていたが、McCawley (1983)は生成文法的な観点からこれらの構文においてwithが真に文的な範疇を補語に取ることを記述した。ここで「文的な範疇」というのは統語論的・意味論的に文としての性質を持ちながら、形態上は時制やコピュラを欠くなど、完全な文とはなっていない範疇のことである。McCawley (1983)はこうした範疇が深層構造では文であり、変形によって表層の形が得られると考えた。

本節では、withが文ないし節相当の補語を取っているという考え方を正当化するMcCawley (1983)の議論を紹介し、それらに対応するフランス語の現象と対照させる。それを通じて、フランス語のavecが同様の用法を持つことを記述する。

1-1. 受身

withは(1)のように受身文相当の節を補語に取るができる。

- (1) With politicians being shot at by snipers every day, I don't see why anyone would go into politics.

この文のwith節は次の受身文と同じ意味を表している。

- (2) Politicians are shot at by snipers every day.

初期の変形文法理論では(2)は(3)から受身変形により派生すると考えられていた。

- (3) Snipers shoot at politicians every day.

¹ フランス語の特殊なavec構文についてはRuwet (1982)も論じているが、その主要な論点はこれらの構文の派生方法をめぐりものであり、McCawley (1983)の挙げる補語の文的な性質が網羅的に記述されているわけではない。

すなわち、受身変形は文を文に写像する変形であり、withの補語に受身表現が現れるということは、withが深層構造で(3)の文を補語に取り、次に受身変形が適用されて表層構造として(1)が導かれるという考え方を正当化する。

Ruwet (1982)が指摘するように、フランス語においてもavecが受身文相当の補語を取ることができる。

- (4) Avec mon père persécuté par la police, je me demande ce que nous allons devenir. (Ruwet 1982: 103)

後述する理由で、(4)ではコピュラêtreは表層に現れていないが、(4)においてavecが(5)に相当する節を補語にしているのは明白である。

- (5) Mon père est persécuté par la police.

1-2. 繰り上げ

withの補語にいわゆる繰り上げ動詞が現れることがある。

- (6) With Gonzalez appearing to know everything about economics, we could hardly put up a better candidate.

動詞appear, seemなどは繰り上げ動詞と呼ばれ、例えば(6)におけるwithの補語は次のような文から補文主語Gonzalezが主文主語の位置に繰り上げられることにより派生すると考えられていた。

- (7) Δ appear Gonzalez to know everything about economics.

このように考える理由は、意味的にはGonzalezはknowの主語であり、appearの主語ではないということである。変形という操作はもともと意味的に関連していながら統語的に離れている複数の要素を理論的に関連付けるために開発されたものであり、(6)において離れているGonzalezとknowの関連がこの変形により保証されることになる。繰り上げ変形はやはり文をターゲットにする変形であり、(6)はwithが深層構造で文を補語に取っているという事実を正当化する。

フランス語の典型的な繰り上げ動詞はsemblerであり、この動詞はavecの補語の位置に生起することができる。

- (8) Avec Jean semblant savoir tout sur l'économie, nous ne pourrions pas choisir un meilleur candidat.

1-3. 空所化

空所化とは二つの節が等位接続され、かつ両者の主動詞が同一であるときに、第二の節の動詞が削除される現象であるが、これはwithの補語にも適用することができる。(9)では第二の節からplayingが削除されている。

- (9) With Pollini playing the Brahms Second and Arrau the Beethoven Fourth, we're going to have a great week of concerts.

空所化が適用できるためには二つの節が必要であるから、この事実にはwithの補語が節であることを示している。これはフランス語でも同様である。(10)では第二の節からinterprétantが削除されている。

- (10) Avec Jean interprétant Liszt et Pierre Debussy, nous allons passer une bonne semaine de concerts.

1-4. 遊離限量子

遊離限量子とは本来主語に関連付けられるべき限量子が主語から離れた位置に生じたものであり、withの補語にも見られる。

- (11) With the students probably all wanting to find out their grades, we had better finish grading the papers tonight.

(11)を遊離限量子を使わずに書くと(12)のようになる。

- (12) With all the students probably wanting to find out their grades, we had better finish grading the papers tonight.

遊離限量子は常に許されるわけではなく、(11)のような語順が可能であるためにはallが関連付けられるべき名詞句が主語という文法関係を持つ必要がある。(11)が可能であるという事実はwithの補語が主語・述語という節相当の構造になっている証拠になる。

フランス語においても、(13)のtousを遊離して、(14)のようになすことができる。

- (13) Avec tous ces linguistes à Paris, on va pouvoir organiser un fameux colloque. (Ruwet 1982: 115)

- (14) Avec ces linguistes tous à Paris, on va pouvoir organiser un fameux colloque. (Ruwet 1982: 115)

1-5. 限量子のスコープドメイン

withの補語は限量子のスコープドメインになる。(15a)には(15b)の読みはあるが、(15c)の読みはない。

- (15) a. With everybody on strike, we're forced to close down.
b. With $[\forall x [\text{person}(x) \rightarrow \text{on-strike}(x)]]$, we're forced to close down.
c. $^*\forall x [\text{person}(x) \rightarrow [\text{with on-strike}(x), \text{we're forced to close down}]]$

つまり、(15a)には「全員がストに入っているので、閉鎖せざるを得ない」という読みはあるが、「すべてのxについて、xがストに入っているので、閉鎖せざるを得ない」という読みは存在しない。例えば、everybodyで表されるのがジョンとメアリーとポールであるとすると、

この3人全員がストに入っているので閉鎖せざるを得ないというのが(15a)の表す意味であり、この文は「ジョンがストをしても閉鎖、メアリーがストをしても閉鎖、ポールがストをしても閉鎖」という意味は持たない。

限量子のスコープドメインをなすのは節の典型的特徴であるから、この事実はwithの補語が節をなしていることを示している。これはフランス語のavecでも同様である。

- (16) Avec tout le monde en grève, nous sommes obligés de fermer le magasin.
(16)には(15b)に相当する意味しかない。

1-6. 否定のスコープドメイン

withの補語は否定のスコープドメインをなす。(17a)は(17b)の意味を表すことができるが、(17c)の意味を表すことはできない。

- (17) a. With no one feeling safe, everyone stays home at night.
b. With $[\neg [\text{person}(x) \wedge \text{feeling-safe}(x)]]$, everyone stays home at night.
c. $^*\neg x [\text{person}(x) \wedge [\text{with feeling-safe}(x), \text{everyone stays at home at night}]]$

すなわち(17a)は「誰も身の安全を感じていないので、全員が夜は家にいる」という意味であり、「xが身の安全を感じているなら全員が夜家にいる、そういうxに該当する人物は存在しない」という意味は決して表さない。

否定のスコープドメインをなすのは節の特徴である。英語には否定辞を含む句が文頭に現れるとそのスコープドメイン内部の主語に対して倒置が適用されるという現象があるが、節がスコープドメインをなす以上、節内部の否定辞が節外部の主語の倒置を引き起こすことはない。

- (18) If no one objects, $[\text{you can} / ^*\text{can you}]$ leave right away.
予想通り、問題のwith節内部の否定辞は主語倒置を引き起こさない。(19)は非文法的である。

- (19) $^*\text{With no one feeling safe, does everyone stay home at night}$

節が否定のスコープドメインになるのはフランス語も同じである。フランス語には文頭の否定辞を含む句が主語倒置を引き起こすという現象はないが、否定連合を用いて否定のスコープをテストすることができる。否定連合とは、口語的でない文体において、否定辞がそのスコープドメイン内部の動詞にneを付加することを要求する現象である。節がスコープドメインを形成するなら、否定辞を含む節の外にある動詞にneを付加することは許されないと予測されるが、この予測は正しい。(20)は名詞的否定辞personneのスコープがsi節を超えて文全体になり、「xが来たらピエールが喜ぶ、そういうxは存在しない」すなわち「ピエールは誰が来ても喜ばない」という意味になることを意図しているが、全く非文法的である。

- (20) $^*\text{Si personne vient, Pierre n'est content.}$

avec NP XPが節をなすなら、否定連合はavec NP XP内部で成立

しなければならぬと予測されるが、(21)が示すように、この予測は満たされる。

(21) a. Avec personne ne se sentant bien, la réunion est annulée.

b. *Avec personne se sentant mal, la réunion n'est annulée.

(21a)は「誰も気分がよくないので、会合はキャンセルされた」という意味であるが、これは文法的である。一方(21b)は「xの気分が悪いために会合がキャンセルされた、そういうxに該当する人物はいない」という意味を意図しているが、非文法的である。この事実はavec NP XPが節に相当することを示唆している。

1-7. 成句

with節には主語と述語とからなる成句が現れることができる。

(22) With the cat out of the bag about our plans, we can't expect Oscar to help us.

(22)のwith節は「我々の計画について秘密がばれたので」という意味である。この成句はthe catという主語とout of the bagという述語が組み合わされて初めて意味を持つ。やはりwithの補語が文に相当する意味を表していると考えられる必要がある。

フランス語でも同様で、(23)のような文が可能である。

(23) Avec la moutarde {lui montant / qui lui monte} au nez, personne ne s'approche d'elle.

1-8. 節を受ける関係代名詞²

よく知られているように、英語では関係代名詞whichが節を受けることができる。予想される通り、whichはwithの補語を受けることができる。

(24) With everyone planning on attending, which I hadn't expected, we'll be short of space.

この事実はwithの補語が節に相当することを示している。

フランス語ではce qui, ce que, ce+前置詞+quoiが節を受けられることができるが、これらはやはりavecの補語を受けられることができる。

(25) a. Avec tout le monde voulant assister au spectacle, ce que je n'avais pas espéré, il n'y aura pas assez de place.

b. Avec tout le monde voulant assister au spectacle, ce qui m'a étonné, il n'y aura pas assez de place.

c. Avec tout le monde voulant assister au spectacle, ce à quoi je ne m'étais pas attendu, il n'y aura pas assez de place.

1-9. 虚辞

withの補語には虚辞が生起できる。虚辞とは意味内容を持たない要素のことで、英語ではitとthere、フランス語ではilがこれに相当する。

(26) a. With there being no possibility of advancement in her present job,

Linda is determined to find a new job.

b. With it obvious that the money is lost, we don't know what to do.

ここで派生という用語を理論中立的に用いると、虚辞は節の派生の最終段階で、節が主語を持たなければならないという要請を満たすために空の主語位置に挿入される、と考えるのが自然である。すなわち、(26)においてwithの補語は虚辞の主語と述語とから成り立つ節であるということである。

前節までに論じた現象では、英語とフランス語との間に実質的な差異はなかった。ところが、(26)に対応するフランス語は存在しない。フランス語には虚辞ilがあるが、これはavecの補語として生起することはできない。

(27) *Avec il (étant) évident que l'argent est perdu, on ne sait pas comment faire.

しかしこれはavec構文の性質とは無関係である。ilは主格の形しか持たないから、主格の生起する位置にしか生起しない。フランス語では主格人称代名詞は定形動詞にしか付加されないため、(27)のような文はもともと不可能である。このため、(27)が非文法的であることを根拠に、avecの補語が文としての性質を持たない、あるいは、英語のwithの補語よりも文としての性質が弱い、といった結論を下すことはできない。

1-10. まとめ

独立の要因で排除される虚辞主語を除き、McCawley (1983)が英語に関して観察したwith構文の文法的な性質がフランス語のavec構文にも見られることを示した。知る限りでは、ここで論じた事実を網羅的に述べた文献は存在しないので、この点で本節は記述文法としての役割を果たしている。

2

3種類のavec NP XP構文

本節ではavec NP XP構文が3つに分類でき、そのそれぞれが主節主語によるコントロールの有無により2つに下位分類できることを示す。

2-1. avec NP Sとavec NP PP

Ruwet (1982)はavec NP XP構文を大きく二つに分類している。avec NP Sと呼ばれる第一の構文ではNPとXPが主述関係にあるが、avec NP PPと呼ばれる第二の構文ではNPとXPは主述関係がない。avec NP SではXPは叙述形容詞句、完了分詞句、受動分詞句、叙述名詞句、現在分詞句、擬似関係節、叙述前置詞句のいずれかであり、avec NP PPではXPはpour / comme / en guise deによって導かれる前置詞句である。第1節に挙げた例はすべてavec NP Sである。Ruwet (1982: 103-104)の挙げるavec NP Sの例を次に示す。(28b-34b)が可能であることからNPとXPが主述関係にあることが分かる。

² McCawley (1983)はこの事実をwithの補語が文としての性質を持つことを示すためではなく、withの補語が統語的に単一の構成素をなすことを示すために挙げているが、Sakai (2003)が論じているように、この議論は成立しない。

(28) XP=叙述形容詞句

- a. Avec Paul malade, la réunion est remise à plus tard.
- b. Paul est malade.

(29) XP=完了分詞句

- a. Avec Attila mort, l'empire des Huns a été démembré.
- b. Attila est mort.

(30) XP=受動分詞句

- a. Avec mon père persécuté par la police, je me demande ce que nous allons devenir.
- b. Mon père est persécuté par la police.

(31) XP=叙述名詞句

- a. Avec mon cousin Jules président de la République, je vais pouvoir mener la belle vie.
- b. Mon cousin Jules est président de la République.

(32) XP=現在分詞句

- a. Avec son mari buvant comme un trou, Bernadette est de plus en plus malheureuse.
- b. Mon mari boit comme un trou.

(33) XP=擬似関係節³

- a. Avec mon livre qui ne se vend pas, je n'arriverai pas à payer mes impôts.
- b. Mon livre ne se vend pas.

(34) XP=叙述前置詞句

- a. Avec ce brouillard sur l'aéroport, les avions ne pourront pas atterrir de toute la journée.
- b. Ce brouillard est sur l'aéroport.

Ruwet (1982)はこれらの構文を次の変形により導くことを提案している⁴。

- (35) a. [PP avec NP_i [_s PRO_i (étant) XP]]
- b. [PP avec NP [(étant) XP]] (同一名詞句削除規則)
- c. [PP avec NP XP] (avec NP _i の位置にある étant を義務的に消去)

PROは発音を持たない代名詞的要素で、NPと同一指示である。深層構造においてavecが文(S)を補語として取ることを考えることにより、補語の文的な性質が保証される。この考え方では、まず(36)の句構造規則によって深層構造が認可され、次に(35)に示す変形により表層構造が生成される。

(36) PP→P NP S

(36)は前置詞句PPが名詞句NPと文Sとに展開されることを述べている。変形文法とは大雑把には句構造規則で生成される文字列に対して変形を適用して表層の文字列を生成する理論であり、Ruwet (1982)のこうした定式化は70年代以前の変形文法の立場を踏襲している。

McCawley (1983)は英語に関して実質的に(35)と同一の派生を提案している。大きな違いは、英語ではbeingの消去が任意であるとい

う点で、これが上の(1)と(4)の差を生む。

一方avec NP PPの例は次のものである。

- (37) Avec Pierre [pour / comme / en guise de] guide, nous avons visité Florence.

このタイプのavec節においてNPとXPとの間に主述関係がないことは(38)によって示される。

- (38) *Pierre est [pour / comme / en guise de] guide.

このためRuwet (1982)はこのタイプの構文を変形では導かず、直接基底生成することを提案している。すなわち、(39)の句構造規則によって直接認可されると考えるのである。

- (39) PP→P NP (PP)

(39)は前置詞句PPが前置詞P、名詞句NP、随意的な前置詞句PPとに展開されることを述べている。

しかし、この考え方ではこの構文においてもavecの補語が文としての性質を示すことを説明することができない。このタイプのavec構文では、第1節に挙げた性質のいくつかはテスト不可能であるが、それでも文としての性質を窺わせる事実がある。第一に、avecの補語は限量子のスコープドメインをなす。

- (40) Avec cinq Japonais comme membres de chaque séminaire, on peut étudier facilement le japonais dans cette fac.

(40)のavec節は「どのセミナーにも5人の日本人がいるので」という意味を表し、cinqのスコープもchaqueのスコープも主節に及ぶことは決してない。第二に、avecの補語は否定のスコープドメインをなす。次のような否定連合は全く不可能である。

- (41) *Nous ne nous égarerons avec personne pour guide.

もしavec NP PPにおいてavecの補語が文に相当しないなら、(41)においてpersonneのスコープが文全体になり、「xが案内役であれば我々は道に迷う、そういうxは存在しない」すなわち「我々は誰を案内役にしても道に迷うことはない」という意味を表すことができるはずであるが、そうはならない⁵。第三に、節を受ける関係代名詞が使用可能である。

- (42) Avec Jacques Chirac et Jean-Marie Le Pen comme finalistes, ce à quoi personne ne [s'était attendu / s'attendait], ces élections ont provoqué un scandale en France.

第四に、NPとXPとの間に性数一致が見られる。

- (43) Avec Marie comme [*le meilleur ami / la meilleure amie / *les meilleurs amis / *les meilleures amies], Bernadette est très heureuse.

Ruwet (1982)はこれらの事実に関し全く言及していない。単に考えうる変形規則がいずれも文法的な文字列を過不足なく生成することができないという事実を指摘するのみで、代案は提出していない。

³ 擬似関係節とは制限関係節とも非制限関係節とも異なる第三のタイプの関係節であるが、ここでその性質を述べる余裕はない。詳細はKayne (1977: 126-128)、Kaneko (2002: ch. 3)を参照。また、avec NP Sに現れる関係節が擬似関係節でありうることの証明は、Ruwet (1982: 106-110)を参照。

⁴ Ruwet (1982)はMcCawley (1983)と異なり、深層構造ではavecにまずNPが後続し、その後文(S)が来る構造を考えているが、この点は本論文の趣旨には影響しない。avecが文的な補語を従えているという点で両者に差はない。

⁵ これに対して通常のavecの用法であるNous ne sortirons avec personneは全く問題がない。この文は「我々がxと出かける、そういうxは存在しない」つまり「我々は誰も出かせない」という意味を表す。

McCawley (1983)は英語の対応する構文に関して、次の派生を提案している。

(44) a. [with [s NP be NP/N']]

b. [with [i NP as NP/N']] (be→as 置換変形)

この考え方ではas(フランス語pour / comme / en guise de)は深層構造におけるコピュラの代替物である。これによりwithの補語が文的な性質を示すことが保証される⁶。

以上から、avec NP Sとavec NP PPはともに文としての性質を共有しながらも個別に習得を要する異なった構文であると言える。

これらの構文は主節主語によるコントロールの有無により二つに下位分類できる。コントロールの有無はavecとayantとの交換の可否によりテストできる。

(45) コントロールのある avec NP S :

{Avec / Ayant} mon mari qui est au chômage, je dois travailler davantage.

(46) コントロールのない avec NP S :

{Avec / *Ayant} les toilettes qui sont hors service partout dans la ville, je suis entré dans un café.

(47) コントロールのある avec NP PP :

{Avec / Ayant} Zinedine Zidane comme meneur de jeu, nous allons gagner.

(48) コントロールのない avec NP PP :

{Avec / *Ayant} Zinedine Zidane comme meneur de jeu de l'équipe adverse, nous serons battus.

2-2. avoirの意味を表す avec NP

前節で紹介したRuwet (1982)の分類は変形の関与というパラメータに基づくものであった。この考え方では必然的にavec NP XPは大きく二つに分類されることになる。この分類には変形を含まないグループの意味論を正しく捉えられないという難点がある。McCawley (1983)はRuwet (1982)が変形を仮定しなかった構文をさらに3つに下位分類している。第一のグループは前節の(44)によって派生されるものである。第二のグループは次の(49)によって派生されるものであり、その例は(50)である。

(49) a. [with [s NP have NP (PP)]]

b. [with NP (PP)] (NPとhaveの消去)

(50) With a friend in every town, Harry feels pretty contented.

こうした変形を仮定する背景には、(50)のwith節が(51)の文に相当するという直感がある。

(51) Harry has a friend in every town.

ここで、(50)をavec NP Sと考えることはできない。なぜなら、(52)の主述関係は成り立たないからである。

(52) A friend is in every town.

(52)は(51)と異なり一人の友達がすべての町に同時に存在するとい

う奇妙な意味を表す。すなわち、(50)ではeveryが不定冠詞より広いスコープを取ることができるのに対し、(52)ではその逆のスコープのみが可能である⁷。

これはフランス語の(53-54)についても同様である。

(53) Avec un ami dans toutes les villes, Pierre est content.

(54) Un ami est dans toutes les villes.

こうした例をavec NP Sと見なせないことの決定的な証拠は、名詞句に後続する前置詞句が現れない例が存在することである。

(55) Avec trois fils et deux filles, elle n'a pas le temps de lire.

(55)のavec節は「3人の息子と2人の娘がいるので」という意味であり、troisとdeuxのスコープが文全体になり、「息子であるような3人のxと娘であるような2人のyに関して、xとyがいるので彼女は読書の時間がない」という意味になることは決してない。

2-3. il y aの意味を表す avec NP

McCawley (1983)はRuwet (1982)が変形を仮定しなかった構文に第三のグループが認められることを指摘し、(56)の派生を提案している。その例は(57)である。

(56) a. [with [s there being NP (PP)]]

b. [with NP (PP)] (thereとbeingの消去)

(57) With this bad weather, we had better stay home.

これは(57)のwith節が「この悪天候が存在する限り」といった存在の意味を表しているという直感に基づいている。フランス語の同様の例がRuwet (1982: 104)によって挙げられている。

(58) Avec ce sacré temps, je ne mettrai pas les pieds dehors.

類例として(59)がある。

(59) Avec 774800 naissances en 2000, puis autant en 2001 selon le bilan démographique livré aujourd'hui par l'Insee, l'augmentation déjà perçue depuis 1997 fait un bond de 4% : du jamais-vu depuis vingt ans. (*Le Parisien*, 06/02/2002)

2-4. 「所有」と「存在」の関係とコントロール

以上をまとめると、McCawley (1983)はRuwet (1982)が変形による扱いが不可能であるとしたavec構文に3つのタイプを認めていることになる。第一のものはavec NP PPであり、第二のものはavoir相当のavec NPであり、第三のものはil y a相当のavec NPである。ところが、このうちavec NP PPはpour / comme / en guise deが現れるという著しい特徴により同定可能であるが、残りの二つは主節主語によるコントロールを考慮することにより統一可能であることが判明する。以下ではその根拠を述べる。

McCawley (1983)によって提案された派生(49)では常に主節主語によるコントロールが存在し、(56)ではコントロールは存在しない。avoir相当のavec NPは広い意味での所有を表し、il y a相当のavec

⁶ この派生が経験的に誤った予測をするため、理論として支持できないという点についてはSakai (2003)が論じている。

⁷ この観察については、Carlson (1977)を参照。

NPは広い意味での存在を表すが、所有と存在との間には(60)の含意関係が成立する。

(60) $\forall x\forall y$ [[posséder (x, y)] \rightarrow [exister (y)]]

(60)は所有されているものは必ず存在すると述べている。例えば、(61a)は(61b)を含意する。

(61) a. Paul a une maison.

b. Une maison existe / Il y a une maison.

すなわち、所有とは存在に所有者の項を付け加えたものに過ぎない。そこで、avec une maisonという表現は、主節主語によるコントロールがあれば所有を表し、それがなければ存在を表すと一般化できる。前者の場合はavecをayantで置き換えることができるが、後者の場合はそれが不可能である。

所有を表すavec NPでは(53)が示すように名詞句NPに場所の前置詞句が後続することがあるのを見た。また、(59)が示すように、存在を表すavec NPにも場所の前置詞句が後続できる。ここで明らかに(62)の含意関係が成り立つ。

(62) $\forall x\forall y\forall z$ [[posséder (x, y, z)] \rightarrow [situé (y, z)]]

すなわち、ある場所に所有されているものは必ずその場所に存在する。例えば(63a)は(63b)を含意する。

(63) a. Paul a une maison à Paris.

b. Une maison est à Paris / Il y a une maison à Paris.

そこで、場所の前置詞句が後続するavec une maison à Parisのような場合においても、主節主語によるコントロールがあれば所有を、なければ存在を表すと一般化できる。前者の場合はavecをayantで置き換えることができるが、後者の場合はそれが不可能である。

場所を表す前置詞句をPP [loc]と表記すると、McCawley (1983)が(49)と(56)で扱おうとしたavec構文はavec NP (PP [loc])構文として統一できることになる。主節主語によるコントロールによって二つに下位分類できるのはavec NP Sおよびavec NP PPと同様である。

2-5. まとめ

avec NP XP構文に3種類が認められることを論じた。avec NP Sと呼ばれる第一の構文ではNPとXPとの間に主述関係が成立する。avec NP PPと呼ばれる第二の構文ではNPとXPとの間に主述関係は成立せず、XPはpour / comme / en guise deに導かれる前置詞句である。avec NP (PP [loc])と呼ばれる第三の構文では、XPは随意的な場所を表す前置詞句である。それぞれの構文は、主節主語によるコントロールの有無により二つに下位分類できる。いずれの構文においても、avec NP (XP)は節としての性質を持つ。

3

非変形文法による理論化の概観

前節では3種類のavec構文が同定された。いかなる言語理論も、(i)これらの構文の表層における統語構造、(ii)これらの構文の持つ

文としての性質、の二つを説明できなければならない。先行研究におけるこれらの構文の理論化は次のようにまとめられる。avec NP Sに関しては、Ruwet (1982)もMcCawley (1983)もavecの補語が文であるような深層構造を仮定することによりこれらの構文が文としての性質を持つことを保証し、変形により表層の形を導くことを提案した。avec NP PPに関しては、Ruwet (1982)は具体的な提案を行わず、McCawley (1983)は深層構造でwithの補語としてコピュラを主動詞とする文を仮定し、コピュラを前置詞に置換する変形により表層の形が得られると考えた。avec NP (PP [loc])に関しては、Ruwet (1982)はやはり具体的な提案を行わず、McCawley (1983)は存在述語あるいは所有述語が主動詞である深層構造からの変形を提案した。

変形文法では、数理言語学において文脈自由文法と呼ばれる文法によって生成された文字列に変形規則を適用して表層構造が得られる。しかし、変形文法は生成能力が強力すぎ、人間が現に難なく運用している自然言語の理論とはなりえないことがすでに証明されている⁸。そこで、1970年代から、チョムスキーの先導する生成文法は変形の力を大幅に制限する方向に理論を進め、1980年頃に統率・束縛理論を確立する。ところが、同じ時期に派生という考え方そのものを一掃する諸理論が登場する。派生という順序に依存する不可逆的操作を含む文法が言語表現の産出・理解のモデルに適さないことはよく知られている(Sag & Wasow 1999)。そこで、これらの理論では、文法を表層の構造に対する制約の体系と考える。こうした理論では統語論が意味論への入力になるといった時間順序は一切仮定されないことになる。また、表層構造以外の表示レベルは存在せず、ある構造が別の構造に変換されるといった破壊的操作は認められない。

本論文で問題にしたavec構文についても制約に基づく理論化が望ましい。本論文の第一の目的は理論の提示ではなく事実の記述であったが、最後に制約に基づく文法理論の一つであるHPSG(主辞駆動句構造文法)理論(Pollard & Sag 1994)による分析の概略を技術的にならない範囲で提示する。HPSG理論は、いかなる統語操作も語の内部構造に関する情報にアクセスすることはできないとする強力な語彙主義の立場を取り、文の適格性に関わるほとんどの情報を辞書に記載する。すでに見たように、McCawley (1983)の提案に基づくこれまでの議論では、avec構文に対して3種類の派生が必要であった。これはavecに子供が独立に習得する必要がある3つの用法があるということの言い換えに過ぎない。そこで、この3種類の構文をavecの持つ語彙情報として定式化しても問題はないことになる。

avec NP Sに関しては、avecが直接的に文的な範疇を補語として選択すると考える。ここでは、動詞以外の範疇も節の中心的要素になることができると考え、(28-34)のすべてが生成できるように理論を組み立てる必要があるが、この考えはすでにStowell (1983)によって提案されている。これによると、動詞以外の叙述的な範疇は動詞

⁸ 文法の数学的性質および文法理論の変遷に関するフランス語による本格的な概説としてAbecillé (1993)がある。

を介さずに直接主語を要求する。そこで、動詞または動詞以外の叙述的な範疇からなる述語をXPと表記し、これが主語を要求することをXP [SUBJ (NP)]と表記することにする。すると、avec NP Sにおけるavecの補語であるNP XPという文字列は、次のリストで表されることになる。

(64) avecの補語: (I, XP[SUBJ (I NP)])

二つのIはこれらが同一の要素であることを表す。つまり、(64)はavecに後続するNPはXPが主語として要求する名詞句である、ということ述べている。これによりavecの補語が主語と述語からなる文的な要素であることが保証される。

avec NP PPにおいては、NPとXPとの間に主述関係は成り立たないが、NPとXPの中に含まれる名詞句、すなわちpour / comme / en guise deの補語との間には主述関係が成り立ち、これがavec NP PPにおいてもavecの補語が文としての性質を示す原因である。そこで、これらの前置詞の補語を[P-OBJ N']と表記し、かつこれらの前置詞が主語を要求しないことをXP [SUBJ < >]と表記すると、avecの補語は次のリストで表される。

(65) avecの補語:

(I, XP[SUBJ < >], P-OBJ N'[SUBJ (I NP)])

(65)は、avecに後続するNPはpour / comme / en guise deの補語であるN'が主語として要求する範疇である、ということ述べている。しかしXPそのものは主語を要求しないから、(38)のような文は非文法的となる。

avec NP (PP [loc])では場所を表す前置詞句は随意的であり、これが存在しないときもavec NPは文としての性質を示すから、この構文の文法的な性質の原因は場所の前置詞句ではなくavec NPという連鎖そのものにある。そこでavecそのものが、主節主語によるコントロールを受けるときは主節主語によるNPの所有、そうでないときはNPの存在を述べる、というように理論を組み立てればよい。場所の前置詞句が現れるときの扱いは多少複雑で、大雑把に書くと次のような事態の階層が必要になる。

(66) a. 存在関係[xがある]+所有者の項y=所有関係[yがxを所有する]

b. 存在関係[xがある]+場所の項z=所在関係[xがzにある]

c. 所有関係[yがxを所有する]+場所の項z=所有・所在関係[yがxをzに所有する]

上記のようにavec NPという文字列が表すのは存在関係か所有関係であるが、場所の前置詞句はzという項を供給する。そこで、存在を表すavec NPに場所の前置詞句PP [loc]を付加するとNPがPP [loc]にあるという所在関係を表すようになり、所有を表すavec NPにPP [loc]を付加すると主節主語がNPをPP [loc]に所有するという所有・所在関係を表すようになる。ここではインフォーマルに述べたが、こうした事実は、HPSG理論におけるタイプ階層の考え方をを用いると、アドホックな仮定を行うことなく定式化できる。

こうしてMcCawley (1983)の提案する派生はすべてavecの持つ語彙情報として再定式化できる。

4

結論

avec NP XPには3つの種類があり、それぞれの用法をavecの持つ語彙情報として個別に習得する必要があるが、いずれの用法においてもavec NP XPは文としての性質を持つ。

□参考文献

- Abeillé, Anne (1993), *Les nouvelles syntaxes: Grammaires d'unifications et analyse du français*, Paris: Armand Colin.
- Carlson, Gregory N. (1977), « A unified analysis of the English bare plural », *Linguistics and philosophy* 1, p. 413-457.
- Kaneko, Makoto (2002), *Syntaxe et sémantique du jugement théique: Étude contrastive de la construction GA du japonais et de la construction Pseudo-Relative du français*, Thèse de doctorat. Université Paris 8.
- Kayne, Richard S. (1977), *Syntaxe du français: le cycle transformationnel*, Paris: Seuil.
- McCawley, James D. (1983), « What's with with? », *Language* 59, p. 271-287.
- Pollard, Carl & Ivan A. Sag (1994), *Head-Driven Phrase Structure Grammar*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Ruwet, Nicolas (1982), *Grammaire des insultes et autres études*, Paris: Seuil.
- Sag, Ivan A. & Thomas Wasow (1999), *Syntactic theory: A formal introduction*, Stanford: Center for the Study of Language and Information (『統語論入門 形式的アプローチ』郡司隆男・原田康也訳、岩波書店、2001年)。
- Sakai, Tomohiro (2003), « La syntaxe de la construction avec NP PP en français », 『言語研究』124, 日本言語学会、97-130ページ。
- Stowell, Tim (1983), « Subjects across categories », *The linguistic review* 2, p. 285-312.

Trois types de constructions avec NP XP en français

SAKAI Tomohiro

Cet article a pour objectif de confronter les constructions en *with* discutées par McCawley (1983) aux constructions correspondantes en français et d'identifier trois types de constructions *avec NP XP*. Nous esquissons aussi une formulation non transformationnelle des faits observés.

McCawley (1983) observe pour *with NP XP* en anglais les propriétés suivantes : ces constructions servent de domaine de (A) passivation, (B) montée, (C) l'insertion de *there*, (D) extraposition, (E) gapping, (F) flottement de quantifieur, (G) portée d'un quantifieur, (H) portée d'une négation, et (I) elles préservent le sens d'une expression idiomatique. Les équivalents français manifestent les mêmes propriétés sauf (C) et (D), qui dans cette langue sont exclues à cause de l'absence d'explétif accusatif correspondant à *there* ou à *it* de l'anglais.

- (A) Avec mon père persécuté par la police, je me demande ce que nous allons devenir. (Ruwet 1982 : 103)
- (B) Avec Jean semblant savoir tout sur l'économie, nous ne pourrions pas choisir un meilleur candidat.
- (E) Avec Jean interprétant Liszt et Pierre Debussy, nous allons passer une bonne semaine de concerts.
- (F) Avec ces linguistes tous à Paris, on va pouvoir organiser un fameux colloque. (Ruwet 1982 : 115)
- (G) Avec tout le monde en grève, nous sommes obligés de fermer le magasin.
- (H) a. Avec personne ne se sentant bien, la réunion est annulée.
b. *Avec personne se sentant bien, la réunion n'est annulée.
- (I) Avec la moutarde {lui montant / qui lui monte} au nez, personne ne s'approche d'elle.

Ces faits montrent que dans ces constructions la séquence *NP XP* est de nature phrastique, plutôt que nominale, à l'opposé de ce qu'on observe dans les compléments des prépositions ordinaires.

Ruwet (1982) propose deux types de constructions *avec NP XP*. Dans le premier, qu'on appelle *avec NP S*, le NP et le XP sont en rapport sujet-prédicat, dont (1-7) sont des exemples. Comme on le voit, en position de XP peuvent apparaître différentes catégories prédicatives.

- (1) XP = AP prédicatif : Avec Paul malade, la réunion est remise à plus tard.
- (2) XP = VP [participe parfait] : Avec Attila mort, l'empire des Huns a été démembré.
- (3) XP = VP [participe passif] : Avec mon père persécuté par la police, je me demande ce que nous allons devenir.
- (4) XP = NP prédicatif : Avec mon cousin Jules président de la République, je vais pouvoir mener la belle vie.
- (5) XP = VP [participe présent] : Avec son mari buvant comme un trou, Bernadette est de plus en plus malheureuse.
- (6) XP = pseudo-relative : Avec mon livre qui ne se vend pas, je n'arriverai pas à payer mes impôts.
- (7) XP = PP prédicatif : Avec ce brouillard sur l'aéroport, les avions ne pourront pas atterrir de toute la journée. (1-7, Ruwet 1982 : 103-104)

Dans le deuxième type, qu'on appelle *avec NP PP*, le XP est un syntagme prépositionnel dont la tête est *pour / comme / en guise de*, et la relation sujet-prédicat n'est pas satisfaite entre NP et XP mais plutôt entre NP et N' complément de *pour / comme / en guise de*, comme le suggère (9).

- (8) Avec Pierre {pour / comme / en guise de} guide, nous avons visité Florence.
- (9) Pierre est {pour / *comme / *en guise de} guide.

Chaque type peut être subdivisé selon la présence ou l'absence de contrôle du sujet principal, comme en (10-13).

- (10) *avec NP S* avec contrôle : {Avec / Ayant} mon mari qui est au chômage, je dois travailler davantage.
- (11) *avec NP S* sans contrôle : {Avec / *Ayant} les toilettes qui sont hors service partout dans la ville, je suis entré dans un café.
- (12) *avec NP PP* avec contrôle : {Avec / Ayant} Zinedine Zidane comme meneur de jeu, nous allons gagner.
- (13) *avec NP PP* sans contrôle : {Avec / *Ayant} Zinedine Zidane comme meneur de jeu de l'équipe adverse, nous serons battus.

Ruwet (1982) propose de dériver *avec NP S* par une transformation et de base-engendrer *avec NP PP*. Cette démarche ne permet ni de rendre compte de la nature phrastique de *avec NP PP*, ni de discerner les constructions qui, selon cet auteur, sont toutes base-engendrées. McCawley (1983) fait remarquer qu'on peut diviser en trois types les constructions pour lesquelles Ruwet (1982) ne postule pas de transformation. L'une de ces constructions est *avec NP PP* que nous venons de voir. Les deux autres sont illustrées en (14-15).

- (14) Avec un ami dans toutes les villes, Pierre est content.
- (15) Avec ce sacré temps, je ne mettrai pas les pieds dehors. (Ruwet 1982 : 104)

McCawley assigne à ces phrases des dérivations différentes, qui permettent de rendre compte de leur nature phrastique.

Toutefois, si l'on tient compte du rapport sémantique entre l'existence exprimée par (15) et la possession exprimée par (14), il est possible d'unifier les deux constructions en (14-15). En règle générale, la notion de possession peut être formulée comme une extension de la notion d'existence. Dans cette optique, (14) et (15) sont des sous-types d'une même construction. En effet *avec* en (14) peut être remplacé par *ayant* alors que *avec* en (15) ne peut pas l'être, ce qui rappelle le contraste entre (10) et (11) ou entre (12) et (13). Nous appelons la construction ainsi identifiée *avec NP (PP[loc])*.

Il est aisé de formuler dans le cadre de la théorie HPSG, grammaire non transformationnelle, les trois entrées lexicales d'*avec* qui permettent de décrire les faits observés. En *avec NP S*, *avec* prend comme compléments un NP et une catégorie phrastique qui attend ce NP comme sujet. Cette idée s'appuie sur la théorie de Stowell (1983) selon laquelle toutes les catégories prédicatives peuvent prendre directement un sujet. En *avec NP PP*, *avec* prend comme compléments un NP et un PP qui domine un N' dont le sujet est le NP qui précède le PP. En *avec NP (PP[loc])*, *avec* exprime la possession s'il y a contrôle du sujet principal et l'existence s'il n'y en a pas. Le PP optionnel représente le lieu où se trouve le référent du NP qui le précède.

On peut maintenant faire l'économie des dérivations proposées par McCawley (1983), qui posent des problèmes d'ordre théorique. Selon notre théorie, la diversité des constructions *avec NP XP* n'est rien d'autre que la conséquence de la diversité des entrées lexicales de *avec*.